

序文

われわれはこの本で、瞑想の実践という、ユダヤ神秘主義のほとんど知られていないが根本的な側面を提示する。

ユダヤ教へのこのアプローチは、専門家の目には狂気か異端と映るほどに隠され、抑圧されてきた。しかし瞑想的ユダヤ教は確かに存在するのであり、その最も有名な代表は間違いなくラビ・アブラハム・アブラフィアである。彼はこの主題に関する数多くの概論をわれわれに伝えている。

アブラフィアの仕事に入門するためには、エルサレム・ヘブライ大学でゲルシヨム・シヨールレム^(三)のカラーの講座を受け継いだモシェ・イデル^(三)の仕事と研究を参照すべきであろう。とりわけ、一九八九年にセルフ社から出版された彼の著作『アブラハム・アブラフィアの神秘主義的経験』を読むべきである^(一)。実際、ヘブライ的瞑想は、タルムード期の黎明である一世紀にすでに見られる。それは、何世紀もの

間秘された形で、ほとんど絶対的な秘密の中で師から弟子へと伝えられてきた。

中世ドイツのハシディームたち（「敬虔なる者たち」）は、敬虔者ラビ・イエフダーの指導のもとに、瞑想の諸実践を数多く発展させ、行なってきたが、それはしばしば、もっぱら神の諸名を組み合わせて唱えることだった。

ここでついでに、ゴレム^{（四）}、すなわち祈りと学習と瞑想の力の息を吹き込まれて創造された被造物の伝説が発展したのもこのドイツのハシディズムの環境においてであったことを指摘しておこう。被造物に生命を与えることができるこの魔術的な力と、神の神秘的な諸々の効力という観念は、『形成の書』^{（五）}（セフェル・イエツィラー）に書かれたアルファベットの組み合わせの神秘に没頭した神秘主義者によって経験された、とりわけ崇高な経験として理解されねばならない。

このように、最初の構想においては、ゴレムは、それを創造した者の忘我の間にしか命を与えられていなかったように思われる。伝説は後からゴレムに忘我的意識の外の存在を与えたのである。われわれのゴレムの解釈は、これらの考えとは異なると同時にそれらに近いものである。「すなわち」ゴレムは新たな「人間とは」別の被造物ではなく、言語と神名の諸文字の組み合わせの力によって吹き込まれた生命エネルギーによって生けるものとなった人間そのものである。

事実、ゴレムは本来、超自然的な力を授けられた魔術的被造物を指すのではなかった。ゴレムという語は逆に、形を与えられた一塊の粘土、またはその他の物質を意味している。それは、その中に生命と魂と精神の息が取り入れられるべき生ける物質である。

したがってゴレムとは物質であり、生命を待つ命なき彫像なのである。

人間は、この「ゴレムの弁証法」、すなわち根源的な生命なき存在と、絶えざる動きの中にある言語によってもたらされる投企のダイナミックな動きによって完全にエネルギーを与えられた生命の間の

交替のうちに組み込まれているのである。

*

われわれは、ヘブライ的瞑想を紹介するために、瞑想的神秘主義の偉大な諸々のテクストを取り上げ直し、アンソロジーを提案することもできたであろう。それは預言者エゼキエル（七世紀）のヴィジョン（幻視）に始まり、ラビ・アロン・ロス（ハンガリー、一八九四—一九四四）で終わるものになっただろう。そしてその間には、タルムード、マイモニデス（スペイン、一二三五—一二〇四）、ウォルムスのラビ・エレアザール（ドイツ、一一六五—一二三〇）、ゾーハル（十三世紀）、グラナダのアブラハムの神秘主義的瞑想（十三世紀）、ラビ・イサク・ルリアとラビ・ハイム・ヴィタル（一五四二—一六二〇）、モシェ・ハイム・ルツァト（一七〇七—一七四六）、ラビ・シャローム・シャラビー（一七二〇—一七七七）、バアル・シエム・トヴ（一七〇〇—一七五〇）、ルバヴィツチのラビ・ドヴ・ペー
ル（Brach）（一七七三—一八二七）、コマルノのラビ・イサク・エイジク（一八〇六—一八七九）などによって書かれたものが含まれる。⁽²⁾

われわれは、ヘブライ的瞑想に接近するにあたって、それを多く実践し、発展させたユダヤ教の一つの潮流を選んだ。それは、バアル・シエム・トヴ、すなわち「良き名の師」という伝説的な人物によって創始されたポーランドのハシディズムである。

シヨールムが正しく言うように、「ハシディズムはユダヤ神秘主義の発展の最後の位相であり」、われわれはこの運動に完全に同一化することはできないにしても、その精神とその諸方法を継承するものである。

ハシディズム運動はそれ自体が多様な潮流を含んでいる。われわれは長年にわたって、ブラツラフのラビ・ナハマン（一七七二—一八一〇）のハシディズム哲学に従い、それを教えてきた。彼は、「ヒトボデドゥット（Hibodédout）」という総称のもとに他の誰にもまして瞑想を発展させてきたバアル・シエム・トヴの曾孫である⁽³⁾。

瞑想実践の長期にわたる実験の後に、われわれは、伝統のテキスト——聖書、タルムード、ゾーハルなど——の絶え間ない学習を伴わない瞑想テクニクの実践はすぐさま精神と瞑想そのものの枯渇に至るという結論に達した。瞑想それ自体が学習ではないかもしれないが、学習は瞑想の原動力なのである。それゆえにこの本は三つの異なる部分に別れており、それらの部分は、そこで扱われる主題のあらゆるハーモニを鳴り響かせるために他の部分を必要とする。

「火花の旅」と題された第一部は、ハシディズムの歴史的基礎、ラビ・イサク・ルリアのカバラとシヤバタイ・ツヴィの偽メシア運動の冒険におけるその起源を手短に説明する。その間に、ハシディズムにその世界観の哲学のおよび神学的核心を与えたルリアのカバラの根本的諸主題が述べられる。

第一部は、われわれにとっての——今日のハシディズムの意味についての一般的な反省から始まる。

ハシディズムを今日見られるような正統派に同化するという罫に落ちないように警戒しなければならぬ。ハシディズムは、ハシディズム運動の信徒たちもまたユダヤ教の諸儀式を実践するとはいえ、この正統派・正統実践派の対極にあるものである。

ハシディズム運動という社会的カテゴリーに入らない者でもハシッド〔ハシディズムの実践者〕になり、ハシディズム思想からインスピレーションを得ることができる。例えばマルティン・ブーバーやアブラハム・ホシユア・ヘツシエル、エリ・ヴィーゼル、ハイム・ポトツク、そしてより非間接的な仕方であるが、

カフカやウッディー・アレンがそうである。

現代のユダヤ文化は、ユダヤ教の——芸術と音楽を含めた——思想と実践の息吹を新たなものにしたハシディズムの寄与を無視するわけにはいかないのである。

本書の第二部「ハシディズムの踊る知恵」は、読書の技術に当てられている。ハシディズムはカバラやタルムードと同じく、まず、テクストの読解と解釈の極めて特殊な技術である。それは、そこで人間が存在の新たな意味を発明するに依じて自らを発明する実存的学习である。「それは」新たなものの伝統における新たな人間「である」。

われわれがこの第二部で提案することはあらゆる偉大なヘブライ的テクストに適用される。まず脱構築的実践であるような「読解術」があり、その目的は、人間が意味の絶えざるダイナミズムのうちに組み込まれることができるように言語を動きのうちに置くことである。

この「読解術」の結果は多様である。すなわちそれは哲学的、政治的、治癒的である。解釈と諸解釈の争いの実施としての読解は、論理と真理から脱却させ、意味の論理学もしくは「不確実性の知恵」へと導くが、この知恵は、クンデラが小説に関して言ったように、近代性の印なのである。政治的視点からすれば、これは、たとえ善意からなるものであれ、全て基礎付けられたイデオロギーに対して、真理を所有しているという幻想を防ぐものである。

われわれが提案する「読解術」は、「炸裂させる読解」という定式に要約することができる。それはすなわち、決定的（最終的）なものの（*définiti*）を不定的なもの（*infiniti*）へと開くために炸裂させることである。それは未来の道を行くことのできない「自己に閉じた同一性」の彼方への探求である。

「読解術」は開き、解放する方法である。

偉大なヘブライ的テキストの特徴は、言語へのこの絶えざる作業、メタ言語のメタ言語である^⑦。その目的はよりよく理解することではなく、生命、すなわち言語のリズムによって絶えず動きつつあるエネルギーのリズムのうちに捉えられることである。

この「読解術」についての探求の間に、そしてこれらの解釈の諸方法を実践に移す中で、われわれは、これらの解釈と解釈プロセスそれ自身が、聴講者たちと、共に解釈する者たちに生じさせるインパクトを分析した。われわれははつきりと、開け、解決、(苦痛の)緩和・安堵と同時に活性化の効果を確認した。要するに、「炸裂させる読解」はわれわれに、読解と解釈の治癒効果を発見させたのである。

このようにして、本による治癒を意味する「ビブリオセラピー」について文字通り語ることが可能なのである。

われわれは、聖書、タルムードおよびミドラシュのテキストの本質的機能の一つは、まさしく「語りの同一性」と呼ばれるようなある同一性を弁証法的かつダイナミックに構造化する力を持つ一群の神話的語りを生み出すことだと考える。

この治癒の方法の複雑な詳細——これは近いうちに出版される著作の対象である——に入ることはせずに、われわれは本書の第三部で、瞑想(学習、解釈)と健康の間の関係の概略を示そうとした。

この第三部のタイトルは「身体と書記法 (corps et graphie)」としたが、それは、ヘブライ神秘主義の諸テキストから、身体とヘブライ語アルファベット文字との関係、一般に身体と言語の関係を明らかにしたからである。

人間が人間であるのは人間的「自然」に応じてではなく、ある乗り越え (dépassement) によって、この(人間的)自然の否定によってなのであり、この否定は無に導くのではなく、人間的なもの、その

自由に責任を持つ者としての人格を基礎付けるある超一自然に導く。^⑩

この超越とこの超一自然への接近は、本質的に言語によって可能である。しかし喋るのは口だけではない。人間は、「身体・魂・精神」の全体において、その世界と生命への関係を媒介する言語記号を絶えず発している。ヘブライ的伝統に由来する瞑想のライトモチーフは「動きのうちに存在のための、動きのうちにある言語」である。

この視点にこそヘブライ的瞑想の意味の全てがある。なぜならそれは、絶えず生じては解体される言語の動きのリズムに従って瞑想し、発音（母音化）し、呼吸することだからである。これを行うために、われわれは、点・線・面の上に基づけられたヘブライ語の言語とエクチュールの基本構造を探索した。本書の最後に紹介したエクササイズは、われわれが最初に示した理論的側面の正しい知識の基礎がなければ成功せず、実践できない。それらは単純で、誰にでもできるものである。ヘブライ語アルファベットの文字の完璧な知識以外の予備的な知識は必要ない。

今一度はつきり言っておきたいが、瞑想のいかなる実践も、その内容に活力を与えうる絶えざる学習なしには可能ではない。

われわれが紹介する一群の理論的データにより、読者は、われわれが示した基礎的エクササイズで素描されたモデルに従って自分で自分のエクササイズを作り出すことができるはずである。

本書のタイトル「ツィムツム」の意味を説明することでこの前書きを終えることにしよう。動詞 *let-samsem* に由来するヘブライ語のこの言葉は、「収縮させる (*contracter*)」、「集中させる・濃縮する (*concentrer*)」ことを意味している。

それは、世界の可能性そのものの起源における神の光の収縮である。そのラビ・イサク・ルリア以来

の理論がユダヤ神秘主義の特殊な部分の全体をなしている「ツィムツム」は、われわれにとって、同一性の原理（同一律）から出て他者の他者性と自己の他者性に場所を開ける動きのうちに存在のモデルを示す。

したがってツィムツムは同時に存在論的であり、実存的であり、人間学的であり、社会学的である。ツィムツムの概念を宇宙論的次元から存在論的・実存的次元に移行させたのはハシディズム、とりわけブラツラフのラビ・ナハマンである^①。

それは次のようなイメージである。神は他者 (l'Autre) に、創造と被造物に場を空けるために自己自身から、自己自身のうちに身を引く (se retirer)。神の母性的な能力もしくはラハマヌート (Rahmanout, 母性、優しさ)、ヘブライ語の Rêhem すなわち「母胎」の能力——この Rêhem という語の文字 [R, H, M] はまた、「順序を入れ替えれば」「明日」を意味する Mahar [M, H, R] という語にもなる。

ツィムツムは存在の最終的な状態ではない。退却の中で、創造と被造物は、「退却によって開かれた」空虚な空間の全体を取り戻して全体性を再構成しようとする動きの中に捉えられるのである。

これは創造された存在のエントロピーであり、それに神の言葉が「ダイー！」(Dai) すなわち「もう十分だ！」という叫びによって限界を設けねばならないのだ。

この限界「付け」の言葉は、逆に、自己自身を制限する（限界付ける）神を、シャダイ (Chadai) という名で名付けるのだが、この名は *chéamar leolamo dai* すなわち「その世界に「もう十分だ」と言う者」という表現の短縮形なのである。

ツィムツムの退却は創造の後で被造物と創造主の「間」の空間を開くが、この空間は、廃棄され、これら両者のいずれをも破棄して致命的な再統一に至る傾向がある。

人間の存在全体が神的なものの全体性のうちに含まれるようなニルヴァーナ（涅槃）を追求すること

の過ち。

神的なものの全体が創造における徹底した内在のうちで廃棄されてしまう汎神論の過ち。

ツィムツムは距離の創造であり、分離としての、超越としての本来の宗教の創造である。

それはひとつの逆説である。「この分離を無神論と呼ぶことができる。それは、分離された存在（者）がただ一人で、彼がそこから分離された存在に融即することなく実存し続けることができるほどに完璧な分離なのだが、彼は信仰によってその存在に与することもできるのである」（レヴィナス）。

ツィムツムは地上の存在と超越した存在の間の、いかなる概念の共同性にも全体性にも至ることのない関係を可能にするのだが、この「関係なき関係」こそが宗教そのもののなのである。

ツィムツムとは、あらゆる全体性の不可能性である。私（自己、Moi）と自己自身との全体性、他人（un autre）、他者（Autre）、もしくは神と全体化する私（自己、Moi）の全体性の不可能性なのである。

「ツィムツム（退却）した存在」とは、このような造語が許されるなら、全体的でない存在、「ダイ」（Dai）、「もう十分だ」という内的もしくは外的な叫びを聞く存在である。それは、ツィムツムの脆い均衡が破れそうになる度ごとに響きわたる叫びなのである。

こうして、ツィムツムはわれわれにとって生命の不定法（*infinif*）に開かれた存在と世界のあり方そのものとなるのである……。

パリ、一九九二年七月八日

マルク・アララン・ウアクニン